

初回である。さてさて何を書けばいいのか。しばし巡らす。絵かきが絵ではなく読み物を書く。ならば、画家と言ふ訳のわからない世界に足を踏み入れることになった、原体験から始めることにしよう。

まずは僕が生まれた家。文具に始まり、画材、額縁の専門店となり、53年前にはまだ地方には珍しい画廊も開く。そんな県内ではもともと古い創業72年になる店で育つ。

ここからは、拙著「風景を拾う」に書いたものと重複するところがあるが、ご勘弁を。

終戦後すぐ、東京から宇和島に引き揚げた数人の絵かきさんがいた。父がその人たちのために油絵具を置き始め、次第に人が集まるサロンのようになってゆ

く。多くは美術教師だが、先生というより自分は絵かきだと気炎を吐くような人たち。また今の時代にありがちな、分野ごとに固まる馴れ合い集団ではなく、さまざまな職業を持ちながらも外に目を向け、教養を高めようとする気風を持った、一家言ある人たちが連日にぎわっていた。ただ一

原体験

人子供である僕はかわいがられ、大人の会話を聞きながら育った。

夏には東京からモデルを呼び、店主催で裸婦の講習会も開いていた。2階のカ

ーテンを閉じて外からの目を遮断し、むせ返るような暑さの中で描き続ける。その夜はモデルを交えて酒を飲み、乱痴気騒ぎ。禪一丁

で踊る者。綱渡りパントマイムする者。カルメンの大合唱をバックに闘牛士登場。シャンソンを歌い、ラテンを奏で、ロシア民謡で声を張り上げ、土着の粉ひき歌をうなりと、ジェスチャーたっぷり、それぞれに芸達者であり、盛り上げ上手でも



あった。若い僕は階段の隅に身を縮め、そんな狂酔大人たちを興味津々のぞき見た。そして中学生になった僕は、せがまれて飛び入り参

加。ギターを弾きながらアメリカのフォークソングを歌うと、初めて聞く新鮮さにやんやの喝采だった。ち

よどその頃が、純粹な西洋かぶれと古い日本が同居した高揚の終焉であり、個々を持ちながら連帯できた人々の、行方定まらない別れの時でもあった。

子供の頃に見た宇和島のあの熱に浮かされたような情景。イズムに加わらない絵かきたちが集まった「エコール・ド・パリ」と匂いが重なってくる。絵かきが絵かきらしく振る舞い、周りも寛容で、芸術家なら赦される、という言葉が生きているような時代がこの地にもあったのだ。そして、あのおもしろさは幻想であつたかのように過去に埋もれてしまった。

僕はそのような環境の中、幼いころから絵を描き、ごく自然に美術の世界に入ってゆくことになる。

(吉田 淳治・画家)